

母性看護実習において男子学生が肯定的にとらえた体験

藤邊 祐子・坂本 保子・高橋 雪子

要旨

本研究は男子看護学生が母性看護実習を振り返って、どのような時に肯定的な体験となったかを明らかにし実習指導への示唆を得ることを目的とする質的記述的研究である。調査期間は2017年11月～2018年3月で、対象は2017年度に母性看護実習を終了した看護系短期大学の男子学生7名である。インタビュー内容から肯定的にとらえた体験に注目した結果、【自分が実施可能なケアを適切に行えた時】【分娩に立ち会い生命の重要性を感じた時】【グループで協力し連携がうまくいった時】【妊産褥婦に受け入れてもらった時】という4つのテーマが抽出された。男子学生は、母性看護実習に不安や戸惑いをもっていたが、肯定的な体験を得られるような調整や指導を行うことで学びを得られると考えられた。

キーワード：男子学生、母性看護実習、肯定的な体験

I. はじめに

分娩件数が減少し、産科医療施設が減少している。それに伴い、母性看護実習を行う施設も減少している。しかし、男子の看護学生は微増傾向にあり、母性看護実習施設の確保や内容の充実が困難になっている。

看護師養成のカリキュラムは、1989年に改正され、男子学生の母性看護実習が必修となった。また、就業看護職員全体に占める男性看護職員2004(平成16)年には54,713名(4.5%)であったが、2012(平成24)年には63,321名(6.0%)と微増傾向にある。そして、看護系大学の男子学生入学数は、2004年4月には780名(8.2%)であったが、2012年には1,916名(10.3%)と増加している^{1) 2)}。

母性看護実習では、対象が妊婦・産婦・褥婦・新生児とほとんどが女性を対象としている。特に妊婦・産婦・褥婦は日常生活が自立している場合が多く、指導を主とする看護を行うことが多い。また、看護援助の内容とし

ては授乳への援助や会陰部の観察など、女性の外性器を扱うことが多く、羞恥心への配慮が重要である。

大部分の看護学生は、生活体験の中で妊婦や新生児と接する機会がほとんどないまま、入学してくる。よって、対象のイメージ化が重要な課題になるが、講義だけではイメージすることは難しく、シミュレーションを取り入れた演習や実習前の練習を重ねることで、対象のイメージ化に力を入れている。また、母性看護実習では、羞恥心を伴う女性のプライベートな部分のケアが多いため、とくに男子学生は抵抗が大きく、遠慮がちな態度が多くみられた。

中島ら³⁾の研究では、学生が母性看護実習で感じるストレスとして【男子学生の看護援助に伴う遠慮・疎外感】が結果として得られており、男子学生は母性看護実習の経験の中で羞恥心を伴う妊産褥婦の看護援助に対して男子学生の立場では受け入れられない状況や

遠慮・疎外感を抱いていることが明らかになっている。中島らの研究結果より、母性看護実習に否定的な感情を持つ学生やストレスを感じている学生は存在すると考えられる。

しかし、尾原ら⁴⁾の研究では男子学生が母性看護を学ぶ意義として、母性看護における看護師としての役割だけでなく、男性、父親、同性としての4つの立場で支援できることに意義を見出していた。また、贅ら⁵⁾の研究で男子学生は、実習中の対象者とのかわりを通して、母性看護学実習に必要な経験ととらえ、実習後は父親としての将来像についても考えていることがわかっている。

そこで、男子学生が否定的な感情を抱いていたとしても肯定的な体験を通して母性看護実習を学ぶ意義を見出すことができれば、今後、看護師として働いていくうえでの動機づけや、家庭人としての役割などが変化していくと考えられる。

看護師を目指す男子学生は一定数存在すると考えられ、男子学生の母性看護実習における実習指導の在り方、実習展開の方向性を見出していく必要があると考えた。

よって、本研究は男子看護学生が母性看護実習終了後に実習を振り返って、どのような時に肯定的な体験となったかを明らかにし、実習指導・実習展開の示唆を得ることを目的とする。

II. 対象および方法

1. 研究協力者

2017年度に母性看護実習を終了した看護系短期大学の男子学生9名のうち、研究協力の得られた7名である。

2. データ収集期間

2017年11月～2018年3月。

3. データ収集方法

プライバシーの守られた、落ち着いて話せる部屋で、研究者と1対1で半構成的インタビューを行った。インタビューの項目は以下

の通りである。

①学生が母性看護実習で特に印象に残っていること。②男性であることで影響があったと感じられること。③男子学生として実習中に配慮されていると感じた場面などである。インタビュー内容は許可を得て録音した。

4. 分析方法

本研究は質的記述的研究である。分析にはSPSS Text Analytics for Surveys version 4.0.1を使用した。インタビューの内容を逐語録とし、逐語録をMicrosoft Excelに1セルにつき1文ずつ入力し、そのデータをSPSS Text Analytics for Surveys Version4.0.1に読み込み、テキスト中に出現したキーワード抽出を行い単語の頻度を算出する単語頻度解析を行った。

その後、言語学的手法に基づき、カテゴリの作成を行った後に、記述された内容に戻りカテゴリの修正を行った。その後、肯定的ととらえられる体験に注目しテーマを抽出した。分析の各段階において母性看護教育研究者3名で妥当性を検討した。

5. 倫理的配慮

研究の目的や意義、匿名であること、データの守秘義務等について口頭で説明し、同意を得た。インタビューに協力することやインタビューで語った内容は母性看護実習の評価には関連がないことを説明した。また、本研究はA大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号17-11)。

III. 結果

1. 7名の対象者に対して、78の文章が得られ、923の単語が出現した。

2. 抽出された頻出単語(図1)は、「思う 22」「自分 17」「褥婦・産婦 14」「できる 13」「赤ちゃん・新生児 12」「感じる 12」「実習 12」「見学 10」「男性 9」「女性 7」「女子学生 7」などであった。

3. 出現してきた単語の相互関係を視覚的に

確認しながら、カテゴリ分けを行った。

4. 本文に戻り、意味内容を確認した結果、肯定的な体験と否定的な体験が抽出された。
5. 肯定的な体験に注目した結果、【自分が実施可能なケアを適切に行えた時】【分娩に立

ち会い生命の重要性を感じた時】【グループで協力し連携がうまくいった時】【妊産褥婦に受け入れてもらった時】(図 2) という 4 つのテーマが抽出された。



図1 抽出された単語

IV. 考察

1. 各テーマからの考察

1) 【自分が実施可能なケアを適切に行えた時】

看護師を目指す男子学生は女子学生と比較し少数派ではあるが、母性看護実習での実習目標を達成しようと努力している姿が見られた。母性看護の対象は全員女性ということもあり、男子学生は対象者に配慮しつつ、自分が実施可能な技術や観察はできるだけ経験しようとする積極性がみられた。

男子学生は、対象が成人女性と新生児であることから、実習で妊婦・産婦・褥婦に対して観察や看護経験ができるだろうかという思いを抱いていた。しかし、印象に残っていることを尋ねると「いろいろ気を付けながらたくさん練習を重ね、産まれて初めて沐浴を行ったこと。」と新生児の沐浴を語るなど、新生児の観察や沐浴などの自分が実施可能な技術や観察はできるだけ経験しようと積極的に臨んでいた。そして、「新生児は、褥婦さんからお預

かりしている大事な赤ちゃんなので、1つ1つ学んだことを意識して安全を考えてできた」など、自分が実施可能なケアを適切に行えた時に、自分を肯定的に受け止められ、実習での肯定的な体験となっていたと考えられる。

2) 【分娩に立ち会い生命の重要性を感じた時】

経膈分娩や帝王切開術を見学することで、女性が自分の生命をかけて、新しい生命を産みだすという場面に立ち会えたことに感動していた。「帝王切開の見学に入らせていただいた。産まれる瞬間、命の誕生の場面に立ち会って、自分もこのように産まれてきたのだなと思った」「自分の母親も妊娠という経過をたどって、自分がいるのだと感じた。自分の命や命の大切さを学ぶことができた」と語った学生もおり、自らが産まれた時の母親に思いを巡らせ、感謝の気持ちを持っていた。

成人女性である産婦や、またその家族に許可を得て、経膈分娩や帝王切開分娩に立ち会

うことができた男子学生もいた。印象に残っていることとして、「命の誕生が印象に残っている。実際に、分娩見学し、出産までの経過を周りのスタッフのサポートがあって、1つの命が産まれたということ」と語っていた。男子学生は、産婦や家族に受け入れられ、新しい生

命の誕生場面に立ち会うことで、自分の誕生のことや、自分を大事に思っていてくれる自らの家族のことを考え、生命の重要性を感じ、実習を肯定的に受けとめられた体験となっていた。

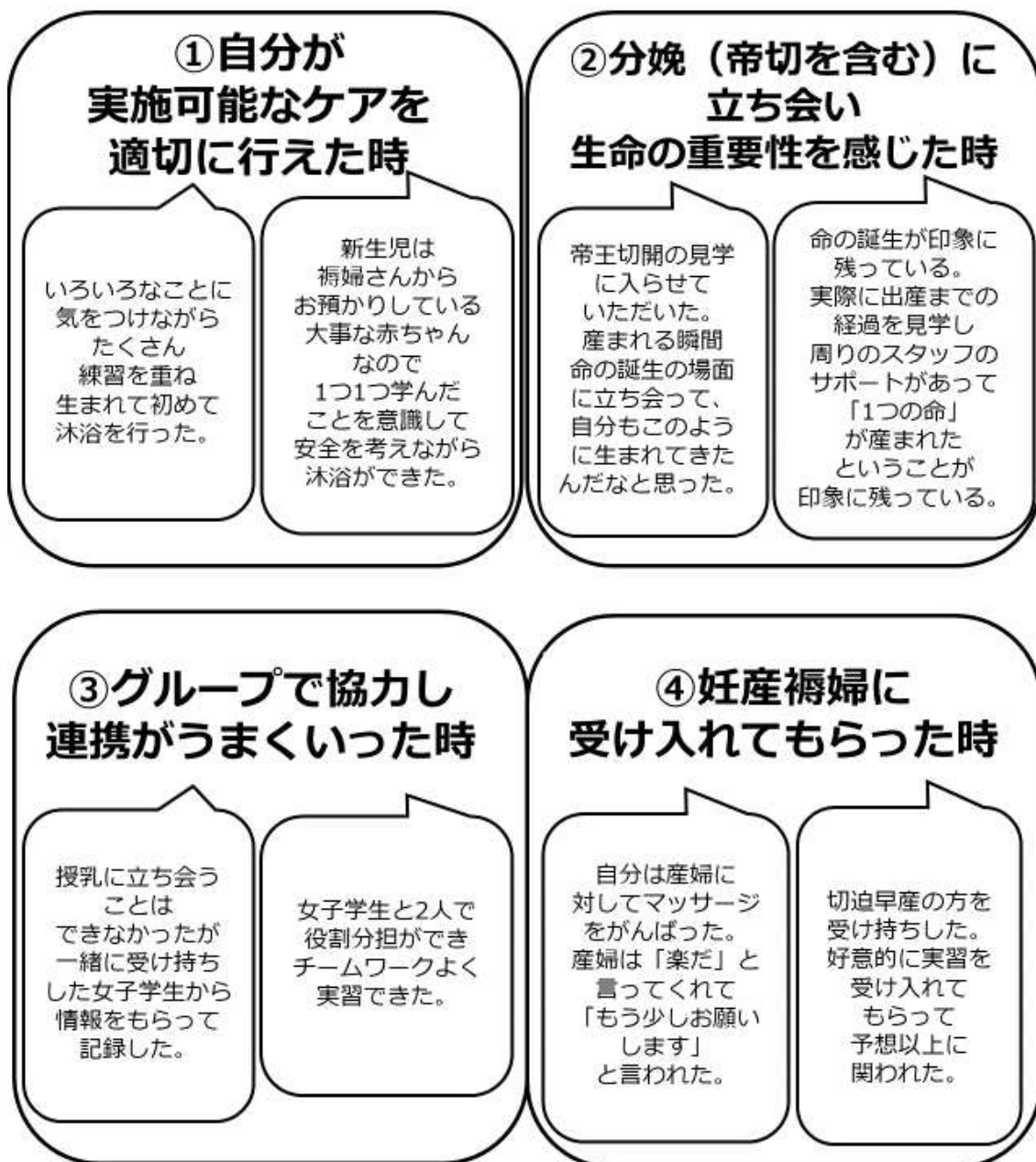


図 2 抽出されたテーマ

3) 【グループで協力し連携がうまくいった時】

グループメンバーの女子学生とペアで褥婦と新生児を受け持った際にうまく連携し情報収集していた。褥婦の疲労を考慮しながら、観察は一人が一度に行い、その情報を共有することや新生児の沐浴を交互に行うなどし、女子学生を密に連携を図っていた。例えば、「女子学生と2人で役割分担ができ、チームワークよく実習できた」などである。この連携がうまくいったときに、実習に対し肯定的な体験となっていた。

また、「授乳には立ち会うことはできなかったが、一緒に受け持ちした女子学生から情報をもらって記録した」等と語り、授乳への支援が母性看護の役割の1つであることを理解できていた。また、他の男子学生も妊婦や褥婦を女子学生と一緒に受け持つことで、患者の情報共有を行っていた。男子学生である自分には妊婦や褥婦に直接たずねにくいことは女子学生と情報を共有し、グループとして連携がうまくいったことが肯定的な体験となっていたと考えられる。

4) 【妊産褥婦に受け入れてもらった時】

はじめて、女性の患者様を受け持つ学生もおり、女性と男性の解剖学的な違いに驚いている学生もいた。また、ある男子学生は実習前に男子だと妊産褥婦は気まずいのではないかと考え、何も経験できないのではないかと不安を抱えていた。しかし、「自分は産婦に対してマッサージをがんばった。産婦は『楽だ』と言ってくれて、『もう少しお願いします』と言われた」「切迫早産の方を受け持ちした。好意的に実習を受け入れてもらって、予想以上に関わられた」等の語りもあり、自分の予想以上に妊産褥婦が受け入れてくださり、女子学生と変わりなく実習を行っていた。

また、妊婦が妊娠中の思いを伝えてくれ、妊娠中から母親になっていくのだということに気づくことができた学生もいた。実習で妊産

褥婦に受け入れてもらったことが肯定的な体験となっていたと考えられる。

母性看護実習で、男子学生は対象が成人女性と新生児であるというに対して、実習で妊婦・産婦・褥婦に対して観察や技術経験ができるだろうか、という思いを抱いていた。

しかし、実習中はグループメンバーの協力を得ることができ、実習指導者、病院スタッフ、教員の指導を受けながら、妊婦・産婦・褥婦のケアも行うことができていた。そして、妊婦・産婦・褥婦やその家族に男子学生である自分を受け入れてもらうことが肯定的な経験となっていた。

新生児に産まれて初めて触れたという学生もおり、その愛らしさや弱さに驚くとともに、自分も父親になるということへも考えが及び、新生児を大事にケアすることに重要性を見出すことができていた。新生児のケアを行えるということは褥婦の了解を得るということでもある。褥婦に受け入れてもらい、コミュニケーションを取り、褥婦と新生児の観察を行うことで、母性看護実習での学びにつながっていた。

2. 実習指導への示唆

本研究では、母性看護実習終了後に男子学生にインタビューを行い、肯定的な体験に注目した。しかし、体験を語っていく中には、否定的な体験も語られた。夫立ち会い分娩を見学した学生は、「自分が夫だったら、看護学生が分娩に立ち会うことが嫌じゃないと言ったら、うそになるかもしれない」という語りや、分娩や帝王切開術の見学に対して「衝撃を受けました」という語りもみられた。「基本的に産科は看護師・助産師は全員女性なので廊下を歩くということにも気を使った」といった語りも見られた。

インタビューの中には実習前の否定的な思いを語ってくれた学生もおり、否定的な感情をもつことは避けられない。この否定的な感情を実習中の肯定的な体験を通して母性看護

実習を行う意義を見出せるような指導を行う必要があると考えられた。そこで、実習前・実習中・実習後の具体的な指導について以下に述べる。

実習前には、学生は看護チームの一員であるという意識づけを行い、自覚を促す。また、対象者によっては多くのケアが実践できることを伝えることが重要である。

実習中には、男子学生であることから産科病棟で配慮すべき点を確認し、学生の不安や心配を受けとめ早期に対処する。また、トラブルがないか確認しながら、グループメンバー間や一緒に受け持ちしている女子学生と連携できるように促していく。男子学生の肯定的な体験を早期に察知して、次の学習につなげさせることが必要である。

実習後には、実習で経験したことを振り返り、看護学生として母性看護実習を経験する意義を考えるように促す。また、命の尊厳について自分の考えをまとめさせ、表現させることが必要である。

V. 結論

母性看護実習における男子学生の肯定的な体験として、【自分が実施可能なケアを適切に行えた時】【分娩に立ち会い生命の重要性を感じた時】【グループで協力して連携がうまくいった時】【妊産褥婦に自分を受け入れてもらった時】という4つのテーマが抽出された。

母性看護実習での肯定的な体験はその後の実習への意欲を高め、学習効果に結びつくことは男子学生に限ったことではない。しかし、自身の性別が原因で消極的になることがないよう配慮・工夫し、看護者としての自覚を高めることが重要である。

女子学生と比較し男子学生は少数派である

が、母性看護実習でも女子と変わらず努力し学びを得ようとしている姿があった。その中でも、肯定的な体験ができる実習となるよう教員が環境を整備し、指導していくことが必要であると考えられる。

利益相反

本研究に関し、開示すべき利益相反はありません。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

本研究は平成29年度八戸学院大学特別研究費の助成を受けて実施したものであり、本研究の一部は第20回日本母性看護学会学術集会にてポスター発表いたしました。

引用参考文献

- 1) 公益社団法人 日本看護協会〔編〕：看護白書平成26年度版，186-187，東京，2014.
- 2) 羽田野花美，末永芳子，中島由紀子他：男子学生の母性看護学実習の現状と課題，保健科学研究誌，11，1-7，2011.
- 3) 中島久美子，早川有子：母性看護実習における学生のストレスと対処行動から捉えた実習指導の課題，群馬パース大学紀要，17，17-27，2014.
- 4) 尾原喜美子，高橋永子，橋本和子他：看護学生の捉えた男子看護学生が母性看護を学ぶ意義，看護・保健科学研究誌，9，51-60，2009.
- 5) 贅育子，小幡孝志，室津史子：母性看護実習における男子学生の思い，ヒューマンケア学会誌，5 (2)，29-36，2014.

執筆者紹介 (所属)

藤邊 祐子 八戸学院大学 看護学科 助教

高橋 雪子 八戸学院大学 看護学科 教授

坂本 保子 八戸学院大学 看護学科 講師